

外来者との繋がりが保証する自立性

アチェ近現代史をふりかえる

西芳実

私が初めてアチェを訪れたのは1995年のことだった。アチェ行きの準備をする私に、ジャカルタのインドネシア人は口々に「アチェ人はファンティックだからアチェに行くのは気をつける」と助言した。アチェ人はイスラム教に狂信的・好戦的・頑なで理解しがたい人々とみなされ、アチェはインドネシア社会において異質な地域であると思われるとの印象を持った。

確かに、アチェにはそう思わせるだけの歴史がある。アチェ戦争(1873-1912年)、インドネシア共和国独立戦争(1945-1950年)、ダルル・イスラム運動(1953-1962年)、アチェ独立運動(1976年-)というように、近現代史を通じて武力紛争が絶えない。外来者がアチェに関わろうとすると、これを排除しようとする動きが必ず起こり、武器を手に入ったアチェ人は勇猛果敢に闘い続け妥協しない、しかも、その基盤にはイスラム教への強い信仰心があるので交渉の余地が少ない——こうした見方が、アチェの植民地化に多大な犠牲を払ったオランダ植民地政府官僚にはじまり、当時のジャカルタの人々の頭の中にも抜きがたくあったのだろう。

しかし、アチェの歴史をもう少し詳しくみてみると、外部世界との関係を絶つよりは、むしろ外部世界の変化を敏感に察知しながら関係を結び維持することをアチェの人々は一貫して重視してきたように思われる。

たとえば、アチェ西南海岸部のコショウ栽培の発展について論じた鈴木(1976)¹は、アチェの人びとが、当時、国際市場で商品価値の高かったコショウに目をつけ、コショウ農園の開発を積極的に行ったこと、そして、この農園事業そのものが新たな自治領の形成を意味していたことを明らかにしている。農園開発はまず、スルタン、あるいは周辺地域の既存の自治領首長の認可の下で行われた。開発初期における安全の確保という意味に加えて、国際市場に通じるアメリカ、インド、イギリスなどの外来商人にコショウを買い付けてもらうには、ある程度まとまった量のコショウを集積させる必要があった。このため、生産量が不安定な初期段階には既存の港や仲買人を利用するという意味からも、スルタンや周辺自治領首長と一種の貢納関係が結ばれた。しかし、コショウ生産が安定してくると、農園開発者は自前の港を建設したり、独自の出荷ルートを確保したりするなどして、スルタンや他の自治領首長から自立をはかった。

19世紀から20世紀はじめにかけてのアチェ社会の構造を分析したシーゲル(1969)²は、自治領首長やウラマー(イスラム指導者)が、交易や

¹ 鈴木恒之 1976「アチェー西海岸におけるコショウ栽培の発展と新ナングルの形成：18世紀末から19世紀前半の」『東南アジア：歴史と文化』No.6、pp.62-93。

² Siegel, James T. *The Rope of God*, Berkeley: University of California Press.

イスラム教育ネットワークの結節点として村落と村落外の世界をつなぐことによって、アチェの農民に対して権威や権力を維持していたことを指摘している。自治領首長は領内で生産される農産物を領外に売りさばくと同時に、必要な生活用品が領内で売られるようにした。ウラマーは村落を越えて広がっていたイスラム教教育ネットワークを通じて外部世界から有用な知識を入手し、人びとに伝えた。

同様のことはスハルト体制期のアチェについても指摘できる。当時、アチェ州の州行政を担ったのは、国立シア・クアラ大学経済学部出身のテクノクラートだった³。アチェ地域経済の実情を知ると同時に開発経済学のタームや概念を理解し、ジャカルタの国家開発企画庁とやりとりができる彼らは、「開発の時代」にアチェと外部世界を結ぶ役割を担うことで指導的立場を確保した。

このように、アチェでは古くから、外部世界との関係を上手に結ぶことが自らの発展につながるということが意識され、外部世界との仲介役を果たすことのできる人物や機関が指導的立場についてきたといえるだろう。人々は常に外部世界と繋がるうとしてきた。

そうしてみると、アチェ戦争やダルル・イスラム運動、そしてアチェ独立運動といった、外来者に対して排他的・暴力的とみえる動きにも、別の側

面があることが見えてくる。アチェ戦争は、オランダがアチェのスルタンや諸自治領首長が持っていた交易権を制限し、オランダの一括した管理下に置こうとしたことに対する反応として理解できる。ダルル・イスラム運動の背景には、インドネシア共和国政府がアチェ州を北スマトラ州に併合し、アチェ＝ペナンやアチェ＝シンガポール間の交易をメダン経由で行うよう求める動きがあった。

いずれも、アチェの人びとがそれぞれに外の世界と結んでいた関係に対して、突然、それを断たせたうえで、オランダなりインドネシア共和国政府なりの管理下に置こうとする動きがまずあった。そのような排他的・暴力的な働きかけに対して同様の反応で対応したと考えられる。

さて、初めて訪問したバンダ・アチェの街だったが、その景観は私の知るインドネシアのほかの街と大差ないという印象を受けた。インドネシア独立を記念したモニュメントや英雄墓地、役所の配置など、インドネシアの一州の州都としての規格になぞらえてつくられているように見えた。アチェで発行されている新聞を手にとると、紙名は「スランビ・インドネシア」(インドネシアの前庭)だった。かつてアチェが東南アジアのなかで、地理的にも、また、イスラム学の集積という点でもメッカにもっとも近い場所という意味で「スランビ・メッカ」(メッカの前庭)と呼ばれていたことを考えると、この紙名はひどく含蓄深いものに思えた。前庭、あるいは玄関前のベランダやテラスの部分をさす「スランビ」は、家の外であって中ではない。中で

³ Morris, Eric Eugene. 1983. *Islam and Politics in Aceh: A Study of Center-Periphery Relations in Indonesia*, Ph.D. Dissertation (Philosophy) presented to Cornell University, Kell, Tim. *The Roots of Acehnese Rebellion, 1989-1992*, Ithaca:

Cornell Modern Indonesia Project ほか。

はないが、外来の客を最初に迎え入れる場所でもある。そのような形でアチェは新たな発展の場を模索しているのだろうかと思ったりした。

「ファナティックなアチェ人」の姿はどこにも見当たらず、基本的にどこでも歓待を受けた。何度か訪問しているうちに、日本人がいるということが知れたのか、見ず知らずの人の訪問を受けるようにもなった。「日本軍占領期に兵補だった父の体調が悪く生活が苦しいので援助してくれる財団を知らないか」「アチェのコーヒーを輸出したいから買い手を探してくれないか」「イスラム寄宿塾再建に対する資金提供者を紹介してくれないか」等々。面食らう私に彼らは再建計画書や兵補の証明書を携えて、その申し出が理にかなっており、場合によっては私にも利益(不利益)があると付け加えながら丁寧に説明するのだった。私自身が仲介者としての役割を期待される存在になっていることを強く感じさせられた。同時に、情報や人脈の分布に大きな偏りがあり、わずかの情報でも、それを持っていることが大きな利益につながる地域であることを思わずにいらなかった。

その後、私は1997年11月から3年ほど、シア・クアラ大学教育学部歴史学科の外国人留学生としてバンダ・アチェで暮らすことになった。インドネシア独立戦争からダルル・イスラム運動に至る過程について詳しく調べるためだった。その間も、アチェの人々が外来者に対して基本的にフレンドリーであるとの印象は変わらなかった。だがその一方で、在留中に知り合いになったアチェ語の先生の言葉も頭を離れなかった。オースト

リアの大学でアチェ語の地方差についての研究で博士号をとり、シア・クアラ大学で英語を教えていたジュナイディ先生は、アチェ人が親切なのは外国人に対してこそだと力説した。北アチェの出身だった先生はバンダ・アチェ市近郊のある村に家を建てて住んでいたが、近所の人々が自分達家族をなかなか受け入れてくれないことに悩んでいた。また、アチェ語の調査を行う際に、外国人と一緒にいくらでも情報提供をしてくれる人々が、自分ひとりで調査に行くと、何をしに来たといわんばかりの態度で、持っている情報をわけてくれないと嘆くのだった。

どうやらここでは、外来者をもてなし、生まれた関係を利用して利益を得ようとする側面の裏側に、競合しそうな相手に対しては関係を閉ざすという側面がびったり張りついているようだった。

バンダ・アチェでの私の生活は、当初、大変のどかに過ぎていった。友人の家で私に部屋を貸してくれることになり、その家の三番目の娘として居場所を定めた。平日はラビラビと呼ばれるミニバスに乗って大学や資料館に通い、週末は郊外にハイキングにでかけたり、浜辺に焼き魚を食べに行ったり、今思えばかなり優雅な時間であった。海も山も田も美しく、魚を始め食材も豊富で、ジャカルタよりもよほど過ごしやす感じていた。牛の群れが車道わきを誰に導かれることもなく歩いている様子は、鶏泥棒が後を絶たないと聞くジャワと比べて治安もはるかに良いことをうかがわせた。軍の駐屯地の前を走る車は徐行しなければ

ばならないといった決まりごとや、スハルト大統領や国軍を批判することへの憚りはあったが、それらはインドネシアのどこでもあったことだ。当時、ピディ、北アチェ、東アチェの 3 県ではアチェ独立を求めるアチェ・スマトラ民族解放戦線 / 自由アチェ運動(GAM)に対するインドネシア国軍による軍事作戦が続行中だったし、バンダ・アチェ市内の刑務所には GAM の活動を支援したとされた人々が政治犯として服役中だったが、少なくともバンダ・アチェ市内では、1980 年代末から始まった GAM による武装闘争は 1990 年代初めまでに鎮圧され、終わったことと捉えられていた。むしろ、軍事作戦の継続が域外の人々にアチェは「危険地域」(Daerah Rawan)であるとの印象を与え、域外からの投資を阻んでいることや、国軍の過剰なプレゼンスが開発に積極的に関わろうとする住民の意欲を損ねているといった点が問題として指摘されていた。

したがって、1998 年 6 月にスハルト体制が崩壊し、国軍の社会的機能の見直しが可能になった際に軍事作戦の停止と国軍の撤退を求める運動が起こったのは自然なことだった。同時に、(1)インドネシアにおけるアチェの歴史的な位置づけ、(2)スハルト政権時代のインドネシア国軍によるアチェ住民に対する人権侵害、(3)アチェの経済発展の遅れ、といった問題が「アチェ問題」として広く認識されるようになり、その解決方法をめぐって、既存の政党だけでなく、学生団体や NGO などさまざまな社会勢力が問題解決の糸口を探して情報収集を行った。一連の動きが新しい経路を求

めてのものだったことは、提示された解決策の中にサバン自由貿易港の開設やイスカンダル・ムダ空港の拡張といった物流インフラの開発が盛り込まれたところにも象徴的である。

情報を共有しようとする動きも生まれた。国軍による軍事作戦は住民の生活に何をもたらしたか それまで、軍事作戦が行われていた 3 県の住民がどのような境遇に置かれていたかについては、未亡人の生活支援などを行っていた一部の女性人権団体や農民生活支援 NGO が情報を蓄積しているだけだった。これらの NGO は、スハルト体制崩壊を機に全国的に高まっていた国軍批判の波に乗じて、ジャカルタの人権団体を通じ、夫を国軍兵士に殺された未亡人や、国軍兵士に強姦された結果父親のない子を生んだ女性の話为国軍による人権侵害問題の 1 つとしてインドネシア国内のメディアに訴えた。

これに触発され、バンダ・アチェを拠点とする学生、知識人、NGO が 3 県にそれぞれ人を派遣し、人権侵害状況の聞き取り調査を始めた。こうした動きをアチェ州政府、各県政府も後援した。その結果、実質 2 ヶ月程度の調査で、1980 年代末から 1998 年までの 10 年間の国軍兵士による住民に対する人権侵害行為として、殺人 1321 件、行方不明 1958 件、拷問 3430 件、強姦 128 件、性的拷問 81 件、家屋消失 597 件、貴金属没収 38 件、車両没収 174 件というデータが収集された。軍が死体を捨てていたとされる丘の発掘も行われ、大量の人骨がみつき、インドネシアのキリング・フィールドだといわれたりもした。「スラ

ンピ・インドネシア」紙は、こうして収集された拷問・強姦・殺人の事例の中から象徴的なエピソードを連日掲載した。言葉にするのもためられるようなむごく衝撃的な内容で、人々は毎朝むさぼるように新聞を読み、「ここまでひどいことが起こっていたとは知らなかった」と嘆きあった。インドネシア政府・国軍も軍事作戦に行き過ぎがあったことを認め、1998年8月、軍事作戦の停止と域外からアチェに派遣していた部隊の撤退を宣言した。

GAM はどのような組織なのか、アチェ・スマトラ民族解放戦線を指導しているハサン・ティロとは誰なのか、本当にスウェーデンにいるのか、まだ生きているのか、といったことについても、人々は情報を求めていた。1999年初め頃までは、多くの人にとって、GAM はどこか現実感のない存在だった。軍事作戦が終わり、人権侵害を行った国軍兵士も域外に撤退し、アチェには平和が訪れるはずだった。1999年6月に予定されていた総選挙に向けて新政党が次々と結成され、「新しいインドネシア」の枠組みのなかで、ジャカルタへ通じる経路も多様化していくはずだった。

しかし、治安は悪化し、事態は経路を多様化する方向にではなく、限定する方向に向かった。

総選挙の前後からアチェの治安は急速に悪化した。1998年末から、国軍兵士拉致事件、治安部隊への発砲、治安当局への協力者に対する拉致・殺害事件などが発生した。総選挙の投票所や集計所となるはずの学校や郡役場といっ

た公共施設に対する放火も総選挙の直前から急増した。これに対応して、インドネシア政府は警察主導の治安回復作戦を実施した。

住民の安全をはかるために導入された治安回復作戦だったが、実際は、住民に対する発砲、不当な拘束、拷問などが行われる結果となった。丸腰の群集に対して警察機動隊が発砲し、人びとが逃げ惑い倒れる姿がたまたま現場に居合わせたテレビ・クルーによって録画され、全国に放映された。GAM との関与を疑われたイスラム寄宿塾が軍の奇襲攻撃を受けて皆殺しにされ、死体が集団埋葬されるといった事件もあり、大々的に報道された。

こうした状況下で、GAM の勢力も拡大した。僻地の村々にまで巡回してくる警察機動隊の存在は、身近に人権団体も地方政府の出先機関も持たない特に僻地の住民にとっては住民生活を脅かすものに見えただろう。そうした中で、武器を手に取り、彼らの活動がシンガポール、マレーシア、スウェーデンと幅広い国にわたっていることを示しながらアチェ住民の利益を説く GAM は、心強い庇護者に見えたとしてもおかしくない。

このようにして、国軍も GAM も、互いに相手のアチェの住民生活の脅威であると非難しながら、自らの存在を正当化しあう構造が形成されていた。個別の解決策をどのように具体的に実施するかよりも、アチェ民族(独立)とインドネシア民族(統合)のどちらを選ぶかをまず決めることが求められた。国軍と GAM との軍事衝突が増すにつれ、人々はわが身の安全をはかるため、双方

の求めに応じて金銭や便宜の供与をはからざるをえなくなった。2001 年からインドネシア政府と GAM とのあいだで話し合いによる問題解決と停戦が試みられ、2003 年 5 月からは軍事戒厳令(2004 年 5 月からは民事戒厳令)が施行されるというように、国軍と GAM との軍事衝突を回避する試みはさまざまな形で続けられている。そのときどきで、国軍と GAM の互いのプレゼンスは変化しているが、いずれにせよ、治安問題の解決が全てに優先されており、その意味で、人々は何をするにしても国軍と GAM のどちらか、あるいは双方と関係をつくり、多くを委ねなければならない状況にある。アチェの人びとが外の世界と繋がろうとする経路を国軍と GAM がそれぞれ独占的に管理しようとしている。

人々はこの状況の中でも、国軍や GAM が関与できないような経路を探して外部世界と繋がろうとし、自立の道を模索していた。しかし、その試みは、秘密裏に、そしてときにはアチェの外で進めるなどの工夫が必要だった⁴。

2004 年スマトラ沖地震・津波が襲ったのはこのような状況下のアチェだった。この災厄が自然災害であり、政治社会問題と切り離して受け止められたこと、その被害のあまりの甚大さゆえに世界中が関心を向けたこと、インドネシ

ア政府自身も独力で対応できないことを早くから認めたことなどにより、様々な機関・団体・個人がアチェへの関わりを開始した。その一方で、これらの人・物・金の流れを管理しようとする動きが特にインドネシア政府・国軍から生まれている。インドネシアが主権国家である以上、政府が特に海外からの人・物・金の流れを管理しようとするのはある意味、当然である。しかし、外来者の活動を制限する理由が「安全保障」である限り、地域の治安の悪化によって国軍の全領域への関与が正当化される構造は変わらない。このような構造が受け入れられている限り、治安問題が全てに優先され、実際の復興がどれだけ有効に達成されたのかは問われないままだろう。また、治安状況の改善を積極的にはかる理由もない。

今は、多くの機関・団体がアチェへ支援の手を伸ばし、人を派遣していることで、インドネシア政府・国軍・GAM は新たに作られようとしている経路を十分に把握できないで見える。これまでのアチェが、限られた特定の機関や人と繋がることでしか自立が達成できなかったため、それらを力づくでも独占して外と繋がるしかなかったとするならば、今は、それぞれの特性に応じてすみ分けながら、もっとも効率よく関係を結べる相手を選べる時期となっているのかもしれない。多くの人が命を落とし、生活の基盤を失ったからこそ、そうした多様な選択が可能になる状況が、1つ1つの支援の試みの中で生み出されることが強く求められている。

⁴ 西芳実「マラッカ海峡を越えて」(『JAMS News』No.27(2003.10.30)pp.34-37)で紹介したような、シア・クアラ大学の講師陣を中心にした、日本・マレーシア・インドネシアなど複数の国をまたがる学術交流ネットワークづくりの試みなど。